

花見酒

不二川
巴人

目次

花見酒	5
あとがき	71
奥付	74
本文	不二川 巴人
カバーイラスト	よしじまあたる

私は、母校の中学の校庭に咲く、桜の木を見上げていた。学校創設時から植えられていると聞く、幹も枝振りも立派なソメイヨシノだ。まだ、いたずらな冬の肌寒さが感じられる春。ざわりと風が空を駆けるたびに、たくさんの花びらが舞う。

俳優という仕事について、それなりの年月が過ぎた。高校入学と同時にこの道に入り、三十を少し前にして、自分の名前はそれなりに売れているようだ。

実力派として評価されているらしいが、それ以上に、人にも恵まれたと思う。挙げていけばきりが無い程に、たくさんの人間がいる。

「ちよっと、話があるんですけど」

ある仕事が終わった後、その『人に恵まれた』と言うのに、もっともふさわしいであろうマネージャーが、傍らから切り出してきた。正直、彼が私のマネージメントをしてくれなければ、今の地位はなかったのではないかと思う。実際、この彼が担当してくれるようになって、私の名前が売れるようになったのだ。仕事の手配から、スケジュール管理やその他、時には個人的な愚痴を聞くために、居酒屋のはしごにもつきあってくれる。敏腕という言葉がぴったりなのに、彼自身は、自分についての文句を一言半句も言わない。年は私よりいくらか下だというのに、全くよくできた男だった。

「何かな？」

「ああ、いえ」

マネージャーの言葉ははっきりしない。それはこの彼にしては珍しいことだった。私にと

つて彼は、仕事上でも欠かせない存在だが、それ以上に、気の置けない友と言った方がいい。妙な水くささを感じつつ、また桜の木を見上げる。目を合わせなくても、二人の間なら通じる。私は彼の言葉を待った。

「桜の木は他にたくさんありますけど、ここには、何か思い入れがあるんですか？」

視線を同じくしての言葉に、私ははっとなった。やはり、見抜かれていたようだ。私は、自分自身の視線が遠くなるのを感じながら、「ああ、そうだよ」と答えた。そのまま続ける。

「この木を見るのも、ここを卒業して以来か……」

私にとって、この学校の桜は、特別な意味を持つ。

専門的な分野で成功をなしている人間が、卒業した母校を訪れて、在校生に講義のようなことをする。そんなテレビの企画への出演依頼がなければ、来る機会はなかっただろう。収録はもうすっかり終わって、各スタッフもはけた。ホテルに戻るのはいつでもいい。その桜との『対面』を、私はもう少し味わっていたかった。

「何か、考えていますね？　そういえば、あなたは桜の花がお嫌いなんじゃないですか？　毎年、花見に誘っても渋い顔をしますよね」

「いや、嫌いななんて事は絶対無いんだが……ちよっと理由があつてな。ここの桜を見ると、思い出すんだよ」

「……ぜひ聞きたいですね、その話」

「いや、先に話を振ってきたのは君だろう？　君から始めてくれよ」

「いえ、やっぱり後でいいです。まずあなたの話を聞くのが、僕の仕事ですから」

振り返れば、いつもそうだった。彼は、長いつきあいになるもの、およそ自己主張というものをしたことがない。

「私の話は長くなるよ？」

「いつものことじゃないですか」

「特に今回は、だ」

「構いませんって」

こちらが譲ってみても、頑ななまでに私を立てようとする。こうなったら、私としては、彼の言葉に甘えるしかない。

さて、と思つて、もう一度改めて桜を見る。

これからのことは、誰にも話したことがない。私の、すべての始まりと言つていい昔話だ。私とマネージャーの間に、沈黙が流れる。ざわり、と、桜の枝が、促すように風に鳴った。

「私が、芝居の道に進むようになった、そもそものきっかけの話だよ。ここには、その想い出がある」

「……その話は、直接聞いたことがありますでしたね。思い出せますか？」

「ああ。詳しく覚えてる。あれば、十五年ほど前、私が中学生だった頃のことだよ……」

*

僕は、自分で言うのも情けないけど、ぱっとしない生徒だ。引っ込み思案で、気が小さくて、いつも、なんだか自分に自信が持てない。勉強はそこそこで、中の上程度。運動はどちらかというと苦手で、いつもぎりぎりだ。なにも飛び出たところなんてなくて、クラスの中でも目立たない。

振り返れば、家の環境によるところが大きいのかなとも思う。平凡なサラリーマンの家庭に産まれて、『その他大勢』を地でいくような生活。両親も『目立たず、波風の立たない生活』をしていればいい』ことを望んでいる感じで、僕もそれに答えているつもりだった。

でも、何事も行き過ぎはよくないもので、いつの間にか、不必要に人の顔色をうかがうようになっちゃった性格が、その頃の僕たちの年頃にありがちな、思春期特有の反抗期の芽すら摘んでしまっていた。いきがっている奴の多いクラスメイト達に、奇妙なあこがれを持つものの、結局は行動に起こせない。そして、進路とかとは別の意味で、ぼんやりと将来に不安を感じていた。けど、どうすればいいのか分からない。束縛なんてないのに、自分で自分を縛って、うんうんと悩み続ける。

僕は、そんなしみったれた性格で、何とか逃げる場所を探そうとして、図書館にこもるようになった。静かな空間で、黙々と本を読み続けた。読書感想文の課題に出るような伝記物よりも、もつと突拍子もない空想の話が好きだった。

それでおとなしくしていれば良かったんだけど、一つ、変な癖があった。胸が躍る物語を読んで、そのフレーズを、口の中で音読することだ。大声を出すようなことはなかったけ

ど、ぼそぼそと呟く様は、傍目にすぐく変に映つただらう。自分自身分かつていたんだけど、やめられなかった。一時だけでも、空想の中に自分の意識を飛ばす事が、唯一と言つていい娯楽らしいものだった。ただ、それを決して人前でひけらかそうなどという気持ちには持たなかった。

そんな中学生生活も最後の年になった三年の頃……僕は、彼女に出会つた。

「はじめまして！ 今日から、皆さんの授業を担当することになりました！」

その人は、新しい年度からの新任教師だった。年は、二十四、五歳かな。僕たち生徒の側からすれば年上に決まっているのに、みずみずしい若さがまぶしかった。決して大柄ではなく、むしろ小さな部類に入る体つき。そして、くりりと大きな目、ちよいとすます鼻、少し厚手の花びらのような唇。同い年の女の子のように、愛らしい感じに整っている。特別に濃い顔立ちでもないのに、よく光を反射して、見る者にはつきりとしたイメージを与えていた。まっすぐ伸びた背筋の半ば程まで長かった髪。身にまとうのは、堅苦しいのとラフな感じのざりざりに着こなした感じの、淡い桜色のスーツ。その色合いも、嫌味ではなく、たつぷりのミルクの中に、数滴赤を垂らしただけのような感じだった。なんとなく、小さな子が背伸びして大人の服を着ている感じさえする。

彼女は、化粧の濃い薄い以前に、内側から輝きを放っている人だった。その光は、高すぎず手が届かないバラの花みたいな遠さと、親しみ深いタンポポの中間を思わせた。

他に浮かぶイメージとしては、お姫様なんだけれども、玉座にすますよりも、戦場で率先して馬を駆るような活発さ、あるいは勇ましさを感じさせる。小さな身体の何気ない仕草、たとえば、ただ歩くだけにしても、空気の方から進んで道を開けるようなりしき。その他、言葉の節々から、元気のみなぎりをひしひしと感じた。それでいて、下品なところがまるで感じられなかったから、不思議だった。

僕が、彼女について、もし他人から聞かれたなら、『強い女性だ』と即答しただろう。それは腕力のことではなく、芯の強さだった。

彼女が赴任して数日、直接的で分かりやすい出来事はなくても、僕はそのことを実感した。思春期というのは、普通に育つてれば、異性に対する興味が強くなるらしい。でも、素直になれば誰も苦勞しないと思う。興味が湧けば、まず、悪意のあるからかいとして出る。それは、僕の周りを見れば分かった。だいたい、関心の強さと珍しさに比例して、その悪意は強くなる傾向にあるのかな。もちろんと言うか、彼女も対象になった。目をつけられたと言ってもいいかも知れない。彼女は、ありとあらゆる嫌がらせに遭った。初めのうちは、それはもう気の毒になるぐらいの有様だった。関係のない下品な質問や野次で授業を妨害するのは序の口で、たとえば、教室の引き戸の隙間に、黒板消しを挟んで、開けた時に落としたりなんていう古典的な物とか、手が込んでくると、水を張ったバケツをロープで吊る奴もいた。その他、教壇に上がり込んで身体を触る、スカートをめくる、髪を引っ張るなどなど、悪戯と言うには度が過ぎた悪行の数々が繰り返された。

僕は、それらの行為には関わりなかった。どちらかというところでも孤立していたタイプだから、関われなかったと言う方が正しいのかもしれない。じゃあ、もし関わっていたなら、その悪戯に加わっていたかと聞かれると、多分、おっかなびつくりで遠慮する。たとえその拒絶が、クラス内でのさらなる孤立に繋がったとしても。

彼女は、チョークの粉をかぶっても、水を頭からかぶっても、その他どれだけ悪戯をされても、困った顔を浮かべるのは少しの間で、すぐに笑顔で立ち直った。僕は、感心とも驚嘆ともつかない思いで、彼女を見つめていた。その前の年だったか、同じように若い別の女の先生がやってきて、同じような嫌がらせにさんざん遭って、とうとう授業中に泣きながら教室を飛び出して、次の日から学校に来なかった……という事件を覚えていたから。僕が彼女の立場なら、絶対泣いてる。それ程のことだったのに、彼女は一切泣かなかった。それどころか、怒るべき所で、はっきりと怒った。

初めて会った時から、大声でないのに、透き通ってよく響く、凜とした声だったから、怒った時の迫力は、そりやあすごかった。僕なんかは気が弱いから、文字通り跳ね上がって縮こまった。でも、彼女は怒りを根に持たなかった。どれだけ怒っても、次の日には笑顔で学校に来た。気まぐれとか、物覚えが悪いんじゃない。許しているんだ。なんて懐の深さだろう。自分には真似できそうにない。この人は強いんだ。すごいんだ。たかだか中学生の僕でも、そのことはよく分かった。

やがて、荒れ狂っていた悪戯も、一ヶ月程でぱったりと止んだ。みんな飽きた……と言うう

より、彼女の強さ、優しさ、もっと言えば人間の大きさに気がついて、自分のしていることのばからしさを思い知ったんだと思う。

僕は、気が付くと、周囲の目をうかがっていた。このことが知られたら、単なるからかいじゃなく、違った意味でクラスの男子達から文句を言われる。それはややこしい。もしかすると、同じ気持ちを抱いている奴は他にもいたのかも知れないけど、とにかく僕は、気取られないように、結果として、いつそうおどおどするようになってしまった。

僕が彼女……先生に抱いたのは、単なる尊敬とはちよつと違う、ぼんやりと甘くて淡い、憧れのような念だった。

*

「恋……ですか？」

「広い意味で考えれば、そうかもな。なにせ初めて抱いた気持ちだったから、自分自身の中でも、妙に処理できなかったことだけは……覚えてる」

*

僕は、先生の授業の時間が楽しみになっていた。言い表せない気持ちを持ってはいても、

具体的に何か行動を起こす、知恵も勇氣もない。いや、もし、自分からお近づきになれる、何かの手段を知っていて、実行するだけの根性を持っていたとしても、何もしなかったと思う。ただ、『近づきたいけど、できないし、そもそもやっちゃいけない』と思いこんでいた。毎日顔を見て、声が聞ければそれでいい。このままでいい。なんとなくいい。そんな日々が続いた。『偶像化』とか『神格化』という言葉を習うのは、もっと後のことだった。

そんなもどかしいバランスが崩れたのは、全くの偶然だった。

その日も、僕は放課後の図書館にいた。数日前から面白そうな新刊が入っていて、早速棚から取り出して、読みふけていた。自分で言うのも何だけど、僕の読書の速さは結構なもので、二、三日あれば通し読みはできた。まず一回目にざっと読み、それ以降は口の中での朗読をして楽しむ。集中力つてのはすごいもので、朗読している時の僕は、どこか別の所へ気持ちりが飛んでいるみたいだった。

「ねえ」

「……その時……で……」

「ねえ、君」

「……現れた！ 姿を見て……」

「おーい？」

「うわあっ!？」

不意に聞こえてきた声に、僕は、『静粛に』という張り紙を無視して驚いた。がたん！ と

椅子が鳴った。

「こんにちは」

「え、せ、先生？」

視線が落ち着くまでに、しばらくかかった。その先に、と言うかすぐそばに、にこにこ笑顔をとたえた桜色の女性……先生がいたものだから、なおびつくりした。図書館は学校全体の施設なんだから、生徒であろうと教師であろうと、部外者でない限り、いてはいけない理由はない。でも、その時の僕は思いつ切り心臓が跳ね上がって、「なんで先生がここに？」という疑問でいっぱいだった。

「あ、あああ、あの……」

「その本、面白い？」

「え？ あ、その……」

どぎまぎしていた。こんなに近くに先生の顔を見ていることに。うつすらと化粧の匂いがした。その葉臭さは本当にわずかで、代わりに、どこか香ばしい……そう、明るい太陽の匂いがした。大人の色香、というものは感じなかった。ただ、ぼくぼくと心臓が跳ねていたことには変わらない。気の利いた言葉なんて浮かばなかった。もし浮かんでも、僕には似合わないことは分かりすぎている。僕はそういう性格じゃない。かあつと顔が熱くなった。

「面白そうに読んでたよね」

「え、ええ……」

「朗読とか、楽しそうだったよ」

「はいっ!？」

なんてことだろう。誰にも聞かれたことがない、聞かせちゃまずいと思っていた秘密の趣味を、よりよってこの先生に聞かれてしまったなんて!

『顔から火が出る』とは、まさしくこんな気持ちなんだろう。うろたえまくって、まずまず言葉が出なくなつた。つうつと額を伝つたのは、冷や汗だった。変な生徒だと思われる。自分自身で少し奇妙だと思ふのに、先生に見られた! 嫌われてしまふ!

……考えてみれば、先生が僕ごときに特別な感情なんて持っているはずがないのに、勝手に決めつけて、僕は青ざめていた。

「その本、読んでみたかったんだけどな」

「で、でしたらどうぞ! あ、あのっ、僕、もういいですから……」

「とてもそうは見えなかつたけど? いいよ、遠慮しなくて」

僕の奇癖を見ても、先生は訝しむどころか、笑顔のまま続けた。ああ、罵るならいっそはっきりそうして欲しい。小さなことなのに、一人だけ、この世の終わりのような気持ちだつた。

「面白いよね」

「な、何がですか?」

「君の朗読」

「あつ……!! す、すみませ……」

「なんで謝るの？」

不思議そうに小首をかしげる先生だった。きよとんとした顔が愛くるしい雰囲気をしてい
ただけど、残念ながら、半ばパニックになっていた僕は、そこまで気づくことはなかった。
先生が続ける。

「物語の朗読とか、好き？」

「は、はい……。実は……」

「ふうん……」

「う……」

何やら考えている素振りの先生を見て、僕は言葉が出ず、消え入りたいほどの恥ずかしさ
を感じていた。元々褒められることなんて期待していない。ただ、どんよりとした暗い気持
ちが、黒い雲のように湧き上がっていた。

「いいね。じっくり聞いてみたいかな」

「……はい？」

「だからさ、君の朗読を、一度大きな声で聞いてみたいなって」

突拍子もないことを言われた気がして、僕は、しばらく目をしばたかかせていた。先生の
目は、どこか輝いていた。その意味なんて、やっぱり、うろたえまくっていた僕には、分か
るはずもなかったのだけれど。

「その話は、また今度ね。ごめんね、読書の邪魔しちゃって。またね」

「あ、あの……？」

いつまでも戸惑いの抜けない僕に、もう一度につこり微笑んで、先生は離れていった。

その後、もう一度本を読もうとしたんだけど、まるでできなかった。

図書館での一件があつてから、四、五日が経った。あの事は、僕にとつてすごく印象があつて、僕個人としてはバランスが揺らいだんだけど、先生との日常に、目に見える変化なんて表れるはずがない。都合のいい思いこみをしなくても、教師が一人の生徒と図書館で会つた、それだけの事実だったから。何かの期待なんて、そもそもすること自体が間違つている。そんなことは、いくら僕でも分かつていた。

ところが、全く予想できないことが起こつた。

「ねえ、君」

放課後。僕は突然先生に呼び止められた。その日の授業では小テストがあつただけ、その出来に関してかな？　と言うより、先生が僕なんかを呼び止める理由なんて、他に思い当たらなかつた。

「少しだけ、時間をもらえるかな？」

ああ、やつぱり来た。職員室に呼び出されて、説教をもらうんだ。そうとばかり考えていたのに、違つていた。

「音楽室まで来て欲しいんだけど」

「音楽室？」

おうむ返しに繰り返す僕。先生は音楽の担当ではないことは分かりきっているから、どうしても繋がらない。首をひねっていると、先生は「ほら、鍵は借りてるから」と、白い手中で、鍵をちやらりと踊らせた。

「あの、音楽室で何を？」

「まあまあ、たいしたことじゃないから。少しだけ、先生に時間ちょうだい？」

僕の心臓はどくんと跳ねた。別に変な妄想をしたわけではないんだけど、どこか悪戯っぽく言われて、常日頃くすぶっていた胸のもやもやが、かあつと燃えさかった気がした。僕は小さく震えながら、「分かりました」とうなずいた。

そして、音楽室。しっかりと分厚い防音の扉を開き、静まりかえった中に入る。階段状に並んだ座席の前に教壇があつて、先生は、そこにパイプ椅子を向かい合わせに二つ置いた。

「座って」

ちよい、と手で促され、言われるままに腰掛ける。先生も、するりと腰を下ろす。先生と近い距離で対面している。そのことだけで、僕の全身はこわばった。腕を伸ばし、膝頭を握りしめ、視線は所在なくさまよった。

「もうちよつと、楽にしようよ」

少し困ったように言う先生。でも、言われてすぐに「そうですか、では」と従えない。む

しろ、気楽に話しかけられればそれだけ緊張した。僕は、あの図書館での時のように、額に冷や汗をたっぷり滲ませていた。

「汗、かいてるね」

「あっ……?？」

一人でかたかた震えていると、突然、柔らかい感触が額にあった。何かと思ったら、それはハンカチだった。柄を見るほどの余裕はないけど、先生の手のひらに収まる程度の大きさで、ごわついたところのない、上品な肌触りの生地だった。先生の手とそのハンカチからは、やっぱり、日向の……明るい日差し匂いがした。素早く、僕の汗が吸い取られる。それだけなら当たり前のことなんだけど、先生の手が僕に触れた瞬間、あれだけ強張っていた緊張が、すうっと抜けていった。知らずのうちに、安堵のため息が出ていた。

「落ち着いた?」

「あ、はい」

僕の動揺を見透かしたような言い方。でも、嫌味などころは全くない。こちらをまつすぐに見つめる目。その視線に、いつしか僕も動じなくなっていた。

「それで、こんなに改まって、何なんですか?」

「うん。前に、図書館で言ったこと、覚えてる?」

僕の問いに、先生はこくりとうなずいた。前にあった図書館の事と言うと、まだ覚えてる。

あの、初めて朗読を聞かれた時のことだ。その事と、今、先生と二人きりで音楽室にいるこ

と繋がらなかつたんだけど、ひとまず「覚えていきます」とうなずいた。

「君の朗読を、聞かせてもらおうと思つてね。ちゃんと。それで呼んだの」

先生が微笑む。あの、一人だけの楽しみだった朗読を聞かせる？ 今、この場で？ なん
て恥ずかしい！ 普段の僕なら、即座に「遠慮します」と断つている。でも、その時の僕は
少し違つていた。いいところを見せようと思つた下心が働いた……のかも知れない。先生が
差し出すノートを、僕は黙つて受け取つていた。ぱらりとめくると、中には、綺麗な読みや
すい字で、台詞がずらずらと並べられていた。それは、お芝居の台本のようなものだった。
「しおりが挟んであるでしょ？ そのの、赤ペンで線を引いている人物の所を読んで欲しい
の」

「これは、先生のオリジナルですか？」

「ええ、そうよ。仕事の合間を見て、ない頭をひねつてね。まだ、全部は書き上がつてない
んだけど」

「へえ……」

日々の読書で鍛えられた目が、素早く文字を追つて、内容を頭に入れていく。テンポのい
い、明るい雰囲気のある、なんだかこの先生らしいなあと思える脚本だった。毎日教務で忙
しいはずなのに、その隙間で、これだけのものを書けるんだ。僕は素直に驚いた。

「引っかかりは気にしないで、気楽に読んでね。思つたままを声にくれたら、嬉しいか
な」

「でも、僕……こういうことするの、初めてなんですけど……」

「分かってるって。だから、気負わなくていいのよ」

下心はあるかも知れなくても、それが自信になんて結びつかない。びくつく僕に、ころころと笑う先生。その笑顔で、逆に僕の腹は据わった。

「じゃあ、いきます」

「はい、どうぞ」

僕は、すう、と息を吸って、朗読を始めた。

先生の脚本は、あらゆる面で分かりやすかった。小難しい文学本にありがちな、もったいぶった台詞がなくて、素直な登場人物達が、まっすぐな物語を繰り広げる。大きな声で『演じる』のは初めてだったし、喋る訓練をしていたわけでもない。だから、多少の引っかけりはあった。それでも、自分なりに情感を込めて読んだ。その時、僕は、たった一人でも『観客』を前にした『演技』を体感して、今までに感じたことのない、気分の高まりを覚えた。

「はい、そこまで。どうもありがとう」

「はあ……」

色をつけてあった箇所を読み終えて、大きく息をつく。通して読んだわけでもないのに、達成感があった。

「うまかったね」

「そうですか？」

「うん、うまかった」

お世辞じゃない。満点をくれたわけじゃないんだろうけれど、おだてているんじゃない。そのことが分かる、短いけど、心のこもった賛辞だった。それは嬉しかったんだけど、喜びが一巡りすると、そもその理由が気になった。

「あの、これって、何の意味があるんですか？」

「ん？ 君を呼んで、これを読ませたこと？」

「はい。意味があるのかなって。突然のことでしたから」

この先生に限って、ただの気まぐれで、こんな手の込んだことをするとは思えない。単純に理由を聞ききたかったんだけど、先生はにこりと笑って、それから、なぜか、どこか困ったような顔になった。

「ないしょ。実になるかどうか、まだ分からないの。無駄にはならないように動いてみるけど」

「動くって？」

「こればかりは、私だけががんばっても、思い通りにはならないのよ」

「はあ……？」

「あはは」と苦笑いする先生。僕は、分かったような分からないような気持ちだった。

初めての『芝居』が終わって、僕たちは音楽室を出た。先生は「成果が出たら、必ず知らせるから」と言って、音楽室の扉を閉めた。

遠ざかっていく桜色のスーツを見て、僕は、なんだか、大きな二人だけの秘密を、先生と共有した気がして、かなりの時間差で、一人浮かれた。

ところが、さらに数日後。僕は、別のクラスメイトや同級生に、同じく音楽室の鍵を見せて話しかけている先生の姿を何度か見て、ひどく落ち込んだ。自分だけじゃなかったのか、あれは二人きりの秘密じゃなかったのか、やっぱり特別じゃなかったのか……そう思うと、無性に悲しくなって、家に帰ってほんの少し泣いた。

*

「純粹だったんですね。微笑ましいな」

「恥ずかしい話さ。女々しいわ、独りよがりだわ」

「そんなことはないですよ。多感な時期らしい話じゃないですか」

「今だから、笑って話せるんだがな」

*

自分以外にも数人、声をかけている。そのことは僕にとってシヨックだったけど、一つ引かかる言葉があった。先生が「動いている」と言ったことだ。何が、どう？ しばらくは

分からなかった。でも、その答えはすぐに出た。

一学期の期末テストが終わった頃だった。学校の廊下にある掲示板に、一枚の張り紙が出た。

『演劇部創設。部員募集中』

顧問として、先生の名前があった。

「そうか、そういうことだったのか……」

「興味、持ってくれた？」

「うわあっ!？」

その掲示を眺めているところに、突然後ろから声がして、大げさじゃなくて、僕は跳ね上がった。振り向くと、いかにも嬉しそうな先生の顔があった。くすくすと笑いながら言う。

「動いてるって言ったでしょ？ 無事に、偉い人の許可が下りたの」

「偉い人って？」

「そりゃあ、校長先生とか、教頭先生その他、ね。新しくクラブを作るのって、意外と大変だったわ」

ひよい、と肩をすくめてみせる先生。「でも」と続ける。

「これから始まりね。そこにも書いてあるけど、秋の文化祭で公演するのが目標なの。この間の朗読は、ちよっとしたオーディションだったってわけ」

「まさか、僕に入れと？」

「希望だけどね。もちろん、君の都合が第一。ただ、私としてはいいかなと思ったから」

「やります！」

「わっ!？」

「あ、す、すみません……」

勢いよく即答する僕に、今度は先生が跳ねた。

芝居をする、と言うことが、どういう事かぐらいは、普通に知ってる。僕は、目立ちたいタイプじゃない。そのつもりもなかった。おまけに、自己主張を嫌う環境と性格をしている。人前でおおっぴらに芝居をすることなんて、今までとは対極のことだ。その時までには、でも、その瞬間、僕の心は変化した。『いいところを見せたい』という下心の復活……もあるのかも知れないけど、それより、この先生のお眼鏡にかなった、という喜び。そして、この先生と、何か一つのことを成し遂げたい、という強い願いだった。

*

「それをきっかけに、あわよくば何か、とか、考えてました？」

「自分で言うのもなんだが、皆無とは言えない、怪しいところだったかな。だが、そもそも、『何か』というのもひどくあやふやだったよ。今の頭なら、道ならぬ……と言い換えられるが、当時はそこまで知らなかった。純か不純か分からない、だが渦巻く衝動だけは感じる。」

そんな気持ちだった」

「あなたらしいですね。安心しましたよ。そんな話は考えられませんから」

「うん？」

「ああ、いえ。なんでも」

*

「やってくれる？」

「はい！ がんばります！ どこまでやれるか、分かりませんが……」

「それは、私も同じよ。手探りの新米顧問だけど、少しつきあつて欲しいの」

「はい！ 喜んで！」

「ふふっ、そう言ってくれると、嬉しいな。目をつけた子が入ってくれて、少し安心したわ」

先生が、安堵に頬を緩める。僕は、胸に暖かな感慨がこみ上げてくるのを感じた。この笑顔のためだけでも、決断した甲斐がある。そんな笑みだった。

自分が頑張ることで、この先生はもっと笑ってくれるのかな？ だとしたら、これほど嬉しいことはない。気持ちちはやった。

かくして、僕の演劇部入部が決まった。

その後、他にも志願してきた生徒達が、放課後に集められた。ほとんどは、先生が事前に

『オーディション』をした奴だったけど、そうでないのもいた。先生が想定していた人数は満たしていた。総勢八人。男子と女子が半々ほどで、バランスはいいらしい。もちろん、全員まったくの初心者。クラブ自体が本当に出来たばかりで、部室の割り当てなんかはない。よって、音楽室に仮住まいとなった。

「みんな、よく集まってくれたわね。お芝居をやるって事は、結構大変なことだけど、ついて来て欲しい」

いつもの、凛とした声だった。ひいき目を差し引いても、決意と覚悟がにじんでいた。その場の空気が、ぴりっと引き締まる。そんな中、ある男子が言った。

「あのお、おれ、前の音楽室で脚本を読んだ時の内容を覚えてるんですけど、役はこんなにいなかったんじゃない？」

確かにそうだった。僕も、あの時に朗読した内容は、結構覚えている。頭数が集まったのはいいけど、配役数とは釣り合っていない。多すぎだ。あぶれた人数をどうするのかという単純な問題があったんだけど、先生の答えは明快だった。

「お芝居は、役者だけいればいいってもんじゃないのよ。舞台装置や小道具、衣装、照明、音楽……いろいろなスタッフの力が必要な。役をしない人には、裏方に回って貰うわ」

ざわつとみんながどよめく。これはだいたい後になって知ったことだけど、本格的に芝居をやってみれば、プロであろうとなかろうと、一つ公演をしようと思えば、役者よりも裏方が重要なことは当たり前だ。どちらが勝っているか、劣っているか、そんなことはまった

くない。と言うか、裏方さんがいないと成り立たない。ただ、その時の僕を含めたみんなには、それが分からなかった。

「じゃあ、おれがこの役をやります！」

「わたしはこつちを！」

「裏方は嫌です！」

口々に訴え始めるみんな。我も我もという感じで、音楽室は騒然となった。僕も、声にこそ出さなかったが、同じように思っていた。まったく、引つ込み思案だったくせに、先生を前にすると無駄に自己顕示欲が湧いてくるもんだ。

収拾が付くのかと思っていたその場の空気だったんだけど、先生が、二、三度大きく手を鳴らすと、驚くほど、まるで魔法のように全員が静まりかえった。

「はいはい、みんなの気持ちちは分かるけど、落ち着いて。これから練習していく中で、全員の適性を見させて貰うわ」

その一言で、みんな黙り込んだ。「裏方をなめてちゃ駄目よ」と、先生は付け加えて、意味ありげにくすつと笑った。

そして、先生は全員にプリントを配った。それは、秋の文化祭に向けた、詳細なスケジュール表だった。その細かさは、すごいものだった。基礎練習、本読み、配役決定、立ち稽古の期間。同時に、裏方の作業期間の目安が割り振ってあって、さらに、それぞれに不測の事態を想定しているのか、いくらかの余裕が織り込まれていた。ああ、この先生はやっぱり丁

寧な人なんだ。プリントの上で美しく躍る文字を見て、僕は嬉しくなった。

「基本的に、そのスケジュールに沿っていくから。明日の放課後、体操服を持ってグラウンドに集合してね」

体操服？ グラウンド？ 体育会系でもないのに？ また全員がどよめいた。みんな、基礎練習の意味も分かっていたから。芝居をするということの労力を、誰も理解していなかった。僕も当然含めて、みんな無知だった。運動が苦手な僕にとって、授業以外に体操服を着るというのは、やっぱり抵抗があった。

「お芝居ってね、体力を使うのよ。土台を固めておかないと、出来るものも出来ないわ」

またもや、先生のぴしりとした声だった。僕を含めた部員達が、その瞬間で完全に納得したとはちよつと言えない。ただ、なんとなく「ああ、先生の言う通りにやらなくちゃいけないだな」ということを認識したのは共通していた。

次の日から、スケジュール表にのつとつた練習が始まった。部員一同体操服に着替え、先生も、えんじ色の凛々しいジャージ姿で現れる。長い髪は、リボンと言うよりむしろハチマキでまとめ上げていて、普段感じていた快活さを、いつそう際立たせていた。

「それじゃ、まずは走るわよ！ グラウンド十周！」

十周!? 体育の授業並の事を言われて、全員がざつと引いた。

「ついて来なさい。ゆっくり目に行くからね！」

戸惑う空気の中、先生が率先して走り出す。みんな、仕方なくついて行く。他の連中はど

う思っているか知らないけど、僕は、軽快に走り出す先生の姿を見て、やつぱり、戦場で先陣を突き進む、切り込み隊長のような勇ましさと、頼もしさを感じた。

ただ、そうは思っているけども、走る事への疲労は同じだ。一日の授業が終わって疲れているところに、グラウンド十周。息が切れると言うか、絶え絶えになった。

「はい！ 少し休んだら、柔軟体操！」

ばんばんばん、と手を鳴らして、先生は矢継ぎ早に指示を出していく。ラジオ体操を軽くやって、適当な人間と組になって、体育の授業ではあまりお目にかかれない柔軟体操をやる。僕の身体は、ひたすら硬かった。先生の指示通り身体を折り曲げるたびに、関節やら筋肉やら骨が、思いつき悲鳴を上げた。苦痛に情けない声も、同じぐらい上げた。

「次、腹筋と背筋！」

次の指示が、また辛かった。足を抑えて貰って、腹の力で身体を起こす。たったそれだけのことが、全く出来ない。なんとか出来ている奴もいたけど、いっぱいはいという感じだった。

先生はと言うと、文句が付けられなかった。女性だから、ということもあるんだろうけど、驚くほど身体が柔軟で、足を開いて地面に座り、後ろから背中を押してもらえば、上半身がぺったりと土に付く。腹筋しかりで、息遣いから力を込めているのは分かっても、造作もなく腹で起き上がっているみたいだった。背筋も、見とれるほどに反った。いや、弓なった。

「お腹周りを鍛えないと、いい声が出ないのよ。みんな頑張れ！」

腹式呼吸、と言う言葉を知っていれば、すぐに納得できたと思う。ただ、そうじゃなかった。芝居をする、という華々しさと、今、苦行のようにやっている、地味で地道な運動の数々が、僕も、他の部員達の中でも、どうしても結びつかなかった。

それでも僕は、弱音を口に出さなかった。芝居と体力の関係を理解したんじゃないくて、先生の言うことに文句をつけるのは失礼な気がしたから。先生はきつと正しい。疑ったら罰が当たる。だから信じる。実際に先生は正しいことが後になって分かるんだけど、その時の僕の気持ちだけを抜き取れば、なんだか、変な宗教の信者みたいなものだった。

*

「活発ってぐらいじゃ足りないぐらい、勢いのある人ですよね。それに統率力もすごい。その仕打ちで文句が出ないなんて」

「その通りだ。今のご時世でこんなことをすれば、どこかの保護者から文句が出るだろうな。いや、あの先生なら、仮に文句を付けられても、絶対にやりこめられただろう」

「しごき初日のご感想は？」

「ははは、単純だったよ。一つの言葉しか浮かばなかった」

*